

## 新村出自筆「東西語法境界線概略」の成立再考 — 新村出と大槻文彦による三枚の地図をもとに —

竹 田 晃 子

### はじめに

要旨：本稿は、新村出による「東西語法境界線概略」と別図、大槻文彦による新資料の、あわせて三枚の地図を対照することで、成立を明らかにし、方言研究史における位置づけを行うものである。

### 1. 目的と背景

日本の方言学史上、明治期の最も大きい研究成果は、国語調査委員会の「音韻口語法取調」による『音韻調査報告書』『音韻分布図』『口語法調査報告書』『口語法分布図』である。この調査は二回にわたって行われ、一回目の目的は、言文一致体の採用・口語文法と標準語選定に関する資料収集、発音矯正・国語教授の改良、口語法の異動・変遷の解明、方言区画確定にあり、1903(明治36)年9月に、音韻29条・口語法38条の調査項目をもって各府県の教員に依頼され、およそ1904(明治37)年4月までに答申書が回収された。その回答は音韻・口語法の各報告書と、地域ごとに塗りつぶす形式の方言地図にまとめられ、1904-1907(明治37-40)年の間に刊行された。言語事実の学問的価値とともに、この調査が世界的にみてもごく早い時期に企画され、短期間で刊行に至ったことも評価されている。

中でも、実際の調査結果に基づいていわゆる東西方言境界線が明示されたことは、国語調査委員会による方言学上の大きな功績とされてきた。『口語法調査報告書』の冒頭「口語法分布図概観」には「仮ニ全国ノ言語区域ヲ東西ニ分タントスル時ハ大略越中飛騨美濃三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方言トシ、以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ノレガ如シ」(p.4)とある。復刻版の解説にあたる平山輝男(1986)によると、「この項は、奈良時代の万葉集東唄・防人歌等の東国方言域とほぼ相通じ、また現代方言学の調査結果ともほぼ通じるので、多くの方言学者が引用するところである。」(ページ番号なし)とある。

国語調査委員会の出版物のうち『口語法分布図』(1907(明治40)年11月)の刊行以前の日付が付された分布図がある。新村出と大槻文彦による東西語法境界線図類である。

新村出自筆「東西語法境界線概略」(以下「概略」と呼ぶ)について、徳川宗賢(1993)はこの図の成立について論じると同時にいくつかの疑問点を指摘したが、新村出の別図「東西語法境界線概要図」(以下「新村概要」と呼ぶ)については末尾でその存在を指摘するにとどめている。また、大槻文彦による「東西語法境界線概要図」(以下「大槻概要」と呼ぶ)も存在

しているが、違いや系統関係は不明のままである。

本稿では、徳川（1993）による重要な疑問点を整理し、その先に控えていたであろう課題をひきつぎつつ、各図の体裁、関連する講演・発表の内容などとの対照を経て、これらの図の成立とその背景を説明する。

## 2. 徳川（1993）による疑問点

『新村出自筆「東西語法境界線概略」』を解説した徳川（1993）は、「この地図こそは、1904年（明37）の年代から考えて、われわれの見ることのできる、日本における方言の東西対立の実態を客観的に明示した境界線地図の第1号である。」と述べ、この図の成立について論じると同時に、次のような疑問点を指摘する。

一点目は、成立年月日についてである。『新村出全集 索引』収載の新村出による稿本・抄本・ノート類のリスト「稿本目録」を根拠に、成立年月日を1904（明治37）年12月13日と推定しつつ、「原典の日付を特定する根拠が未詳なのは残念である。未発表の日誌などによるのだろうか」と疑問を呈する。

二点目は、音韻項目の反映について、「概略」識語と新村（1938）が音韻項目も図示したかのような書きぶりであることを指摘し、「この地図に利用されている委員会資料が、口語法関係のもののみであることはほとんど確実であろう。（中略）文中の「発音」とは、買ッテと買ウテの違いとか善ク（テ）と善ウ（テ）の違いを指すと考えるのが穏当なところであろう。」と推定する。

三点目は、複数図の存在について、「概略」の自筆表題に「別ニ小図アリ参照スベシ」とあること、さらに「稿本目録」には「東西語法境界線概略（古代東語区域対照）」はあるが新村出（1938）「上田先生と方言調査」の文中にあらわれる「東西両方言区域境界仮想図」が掲載されていないことをあげ、「不安は残るもののいまは異名同物であると考えておくことにする。」と述べる。これについてはさらにその末尾「補記」で、「本稿校了後、ぜひ補わねばならぬ資料が見出された。雑誌『方言』1933年6月号の巻頭を飾った「東西語法境界線概要図」（明治卅七年十二月十三日記）である。（中略）この地図には音韻調査の結果も反映されており、きわめて注目すべきものであるが、いまこれ以上深入りしないこととする。」と述べ、その後の加筆修正を断念している。

## 3. 各図の対照

### 3. 1 各図の体裁・内容

まず、各図を示し、内容を比較しつつ新村出と大槻文彦の著述内容と照らし合わせ、作成の経緯を明らかにする。

各図は次のようになっている。

新村による「概略」（図1）はカラーで、大判の紙を購入後に貼り合わせる形式の市販白地図に絵の具や墨などで記入されており、左上に後年の覚え書き、裏に題名が記されている。「新村概要」（図2）は印刷された白黒写真（およそA5版）が残るのみで、新村出記念財団（重山文庫）にも現物が確認できないとのことである。「大槻概要」（図3）はカラーで、新村

図とは異なり、海洋が青色絵の具で塗られている。境界線の絵の具は海洋の青色絵の具の上に載せられており、丁寧な手順で描かれたことがわかる。

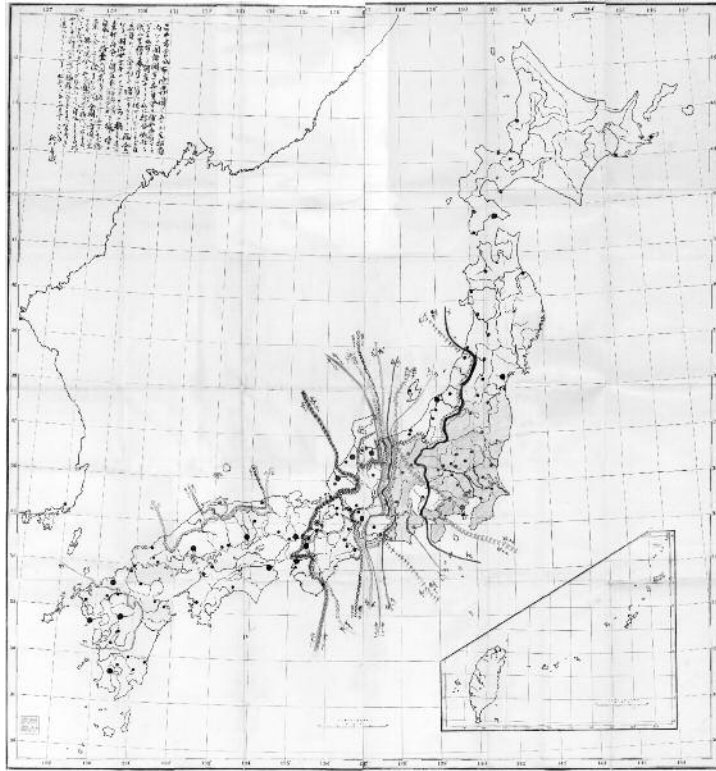
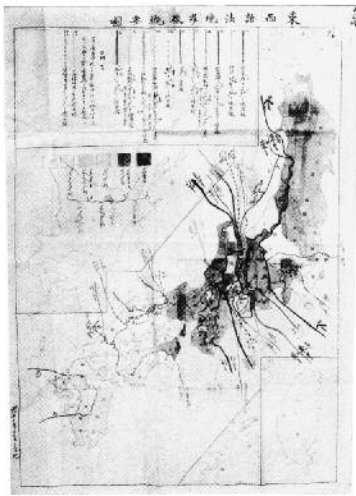


図1 新村出「東西語法境界線概略—古代東語區域對照—」



(原書複製)

図2 新村出(作図)・江實(撮影)  
「東西語法境界線概要」

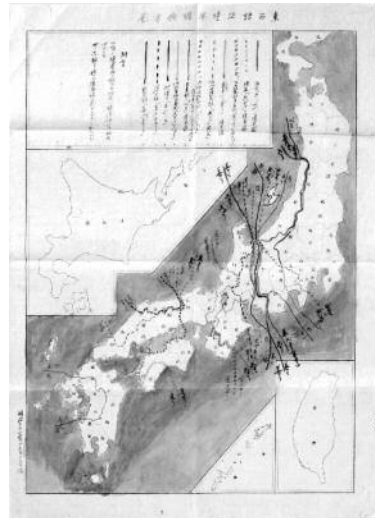


図3 大槻文彦「東西語法境界線概要」

結論を先取りすると、これらの三図は、内容から考えて「大槻概要」「新村概要」「概略」の順で成立したと考えられる。ただし、最初に新村出による「祖図」があり、大槻がそれを丁寧に書き写して「大槻概要」を作成した後、新村は改訂を重ねて「新村概要」を作成し、さらに「概略」にまとめ、東国語との対照を行ったと考えられる。

三図の比較のために、表題、白地図、作成年月日、凡例欄の体裁と凡例、東西の境界線の種類と数、音韻に関する内容、附言・追記・識語など、形状についてを、表1～8と図4～14に示した。

表1の標題については、「概略」のみに古代語との対照が標されており、他の二枚と異なる。

表1 標題

|      | 表 題   | 位 置                                  |
|------|---|--------------------------------------|
| 概略   | 東西語法境界線概略—古代東語區域對照—<br>明治卅七年十二月製／別ニ小図 <sup>1)</sup> アリ参照スベシ／(追記ス) | 裏面に毛筆で縦書き。「明治」から「(追記ス)」までは万年筆による朱書き。 |
| 新村概要 | 東西語法境界線概要圖  | 枠外上部に横書き。                            |
| 大槻概要 | 東西語法境界線概要圖  | 枠外上部に横書き。                            |

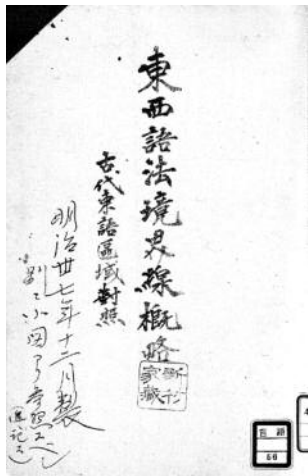


図4 題名：概略

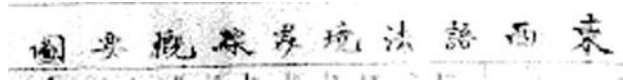


図5 題名：新村概要



図6 題名：大槻概要

表2 白地図

|      | 大きさ   | 特 徴  |
|------|---|--|
| 概略   | 縦101×横93cm。縦35cm×横約4cmの紙6枚を貼り合わせたもの <sup>2)</sup> 。 | 緯度線・経度線その他、海岸線・湖岸線・主要河川・主要都市の位置・旧国境線が印刷されている。縮尺は180分の1、奄美・沖縄・台湾は360万分の1。 |
| 新村概要 | 口絵写真しか残っていないため、不明。                                  | 左上に凡例欄がある。海岸線・湖岸線・府県名・府県境が印刷されている。縮尺不明。                                  |
| 大槻概要 | 縦56×横40cm。  | 同上。  |

1) 徳川 (1993) : pp 7 - 8 「別の地図ないしは小図について」参照。

2) 徳川 (1993) : p.11 「白地図」参照。

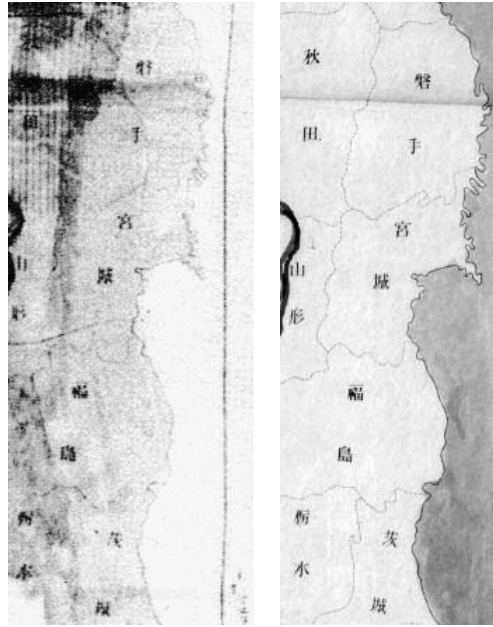


図7 新村概要（左）と大槻概要（右）の白地図：東北地方

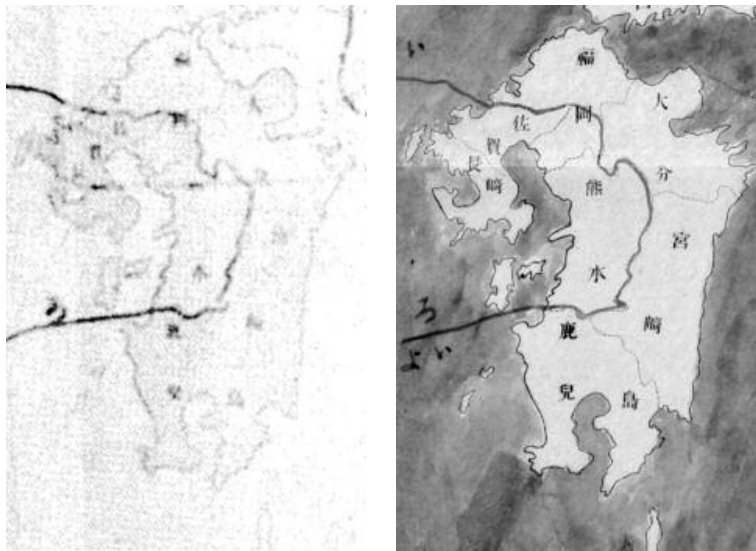


図8 新村概要（左）と大槻概要（右）の白地図：九州地方

表2の白地図について、「概略」は市販の白地図と思われるが、「新村概要」と「大槻概要」は同一の仕様である。府県名が印刷されており、凡例欄が左上に用意されている形状が『音韻分布図』『口語法分布図』に似ていることから、これらの作業用と推定される。

表3 作成年月日

|      | 年月日           | 位置          |
|------|---------------|-------------|
| 概略   | 明治三十七年十二月製    | 裏面に朱書き      |
| 新村概要 | 明治三十七年十二月十二日記 | 枠外左下に毛筆・縦書き |
| 大槻概要 | 明治三十七年十二月十三日記 | 枠外左下に毛筆・縦書き |



図9 新村概要（左）と大槻概要（右）の日付

表3の作成年月日について、『新村出全集 索引』「年譜」には1904（明治37）年12月13日の部分に「『東西語法境界線概要図』を編了す。」とあり（p.500）、題名が一致することから、これは「新村概要」のことであると思われる。しかし、日付が一致せず、「新村概要」には図9（左）のように12月12日とある。

同「稿本目録」「書誌」<sup>3)</sup>に「新村概要」はないが、「東西語法境界線概略（古代東語区域対照）／明治37年12月」（p.467）とあり、これは「概略」を指すと思われる。

これらのことから、明治37年12月12日あるいは13日に作成されたのは「新村概要」であり、「概略」は12月中に作成されたことはわかるが、日は特定できないということになる。徳川（1993）による疑問点の一点目（成立年月日の特定について）は、異なる二つの資料を同一資料と混同したことによって生じた疑問であると思われる。

また、表8で後述するように「新村概要」の枠外右上には「第三稿」とある。このことは、

3) 新村出の全著作・原稿・手紙の類をリスト化したもの。

現存する「新村概要」（第三稿）の他に、少なくとも第一稿、第二稿が存在したことを示すもので、日付に12月12日（「新村概要」枠外左下）と13日（年譜）の両方があることと合わせると、三枚以上の図が新村によって作られたことを意味すると考えられる。

「大槻概要」については、欄外左下の日付が12月13日であり、「新村概要」の成立日（12月12日あるいは13日）の後半の日付と重なることから、「新村概要」類の書写であると考えられる。

表4 凡例欄の体裁

|      | 体 裁  | 位 置                     |
|------|--|-------------------------|
| 概略   | (凡例欄・凡例なし)   | (なし)                    |
| 新村概要 | 凡例は、線種（上）・文字（下）がある。計13種類（うち、附言の後に2種類）。凡例に順不同の番号あり。凡例の語例に対して「東」「西」の区別が付されている。 | 左上枠内に、あらかじめ用意された凡例欄がある。 |
| 大槻概要 | 凡例は、線種（上）・文字（下）がある。計11種類。末尾に附言がある。凡例には番号・東西区別なし。                             | 同上。                     |

表4に凡例欄の体裁、表5に凡例の文言・番号・並び順について、表6に境界線の種類数と本数をまとめた。図9～11は、境界線を取り出して同一の白地図上に描きなおしたものである。

これらの境界線を比較すると、「新村概要」と「大槻概要」の境界線のうち共通するものの実線・点線等の種類は同じだが、「概略」だけは異なっている。線の位置については、「バー」「来（コ）（キ）ヨー／来（コ）ー」の日本海側に若干のズレがあるものの、おおむね同様の配置で境界線が引かれており、大きな食い違いはないとみられる。なお、「大槻概要」「概略」は、境界線が重ならないように並べて配置するなどの工夫が徹底されているのに対して、「新村概要」は口絵写真しか残されていないため判別しがたいとはいえ、あまり徹底されていないように見える。

境界線の有無を比較すると、食い違いが観察される。まず、「新村概要」と「大槻概要」を比べると、「新村概要」には「読マセテ／読マソー」1本と「読マセヨー（マシヨー）／読マソー」類4本、「下一段活用の有無境界線」1本があるが、「大槻概要」にはこれらの境界線はない。一方、「大槻概要」には「見よう／見う」が1本あるが、「新村概要」にはない。

これらと比べると、「概略」は、「新村概要」と「大槻概要」で食い違っていた4種類の境界線がすべて削除されたような状態である。具体的には、「新村概要」の「読マセテ／読マソー」・「読マセヨー（マシヨー）／読マソー」類・「下一段活用の有無境界線」と、「大槻概要」の「見よう／見う」が欠けている。さらに「概略」には、富山県に文字の書き込みがない境界線1本があり、他の線の種類と色と同じであることから「受ケヨー／受キヨー」の境界線とみられる。富山県のこの1本は「新村概要」「大槻概要」にはない。

また、境界線の文字表記についてみると、「大槻概要」はひらがな・漢字ひらがな交じり（促音を除く）とひらがな使用が徹底されているが、「新村概要」と「概略」はカタカナ・ひらがな・漢字ひらがな交じり・漢字カタカナ交じりと種類が多い。

くわえて、「概略」には、主要都市とみられる全国の地点に墨による点が加筆されている。ほかに、福島県・長野県・静岡県に黄色絵の具、関東7都県に茶色絵の具が塗られているが、徳川（1993）では、後述する新村(1905)の内容と比較して、「この彩色部分が、『万葉集』の東歌防人歌の詠まれた地域である」と述べている（p.9）。このことは、「概略」の副題に「古代

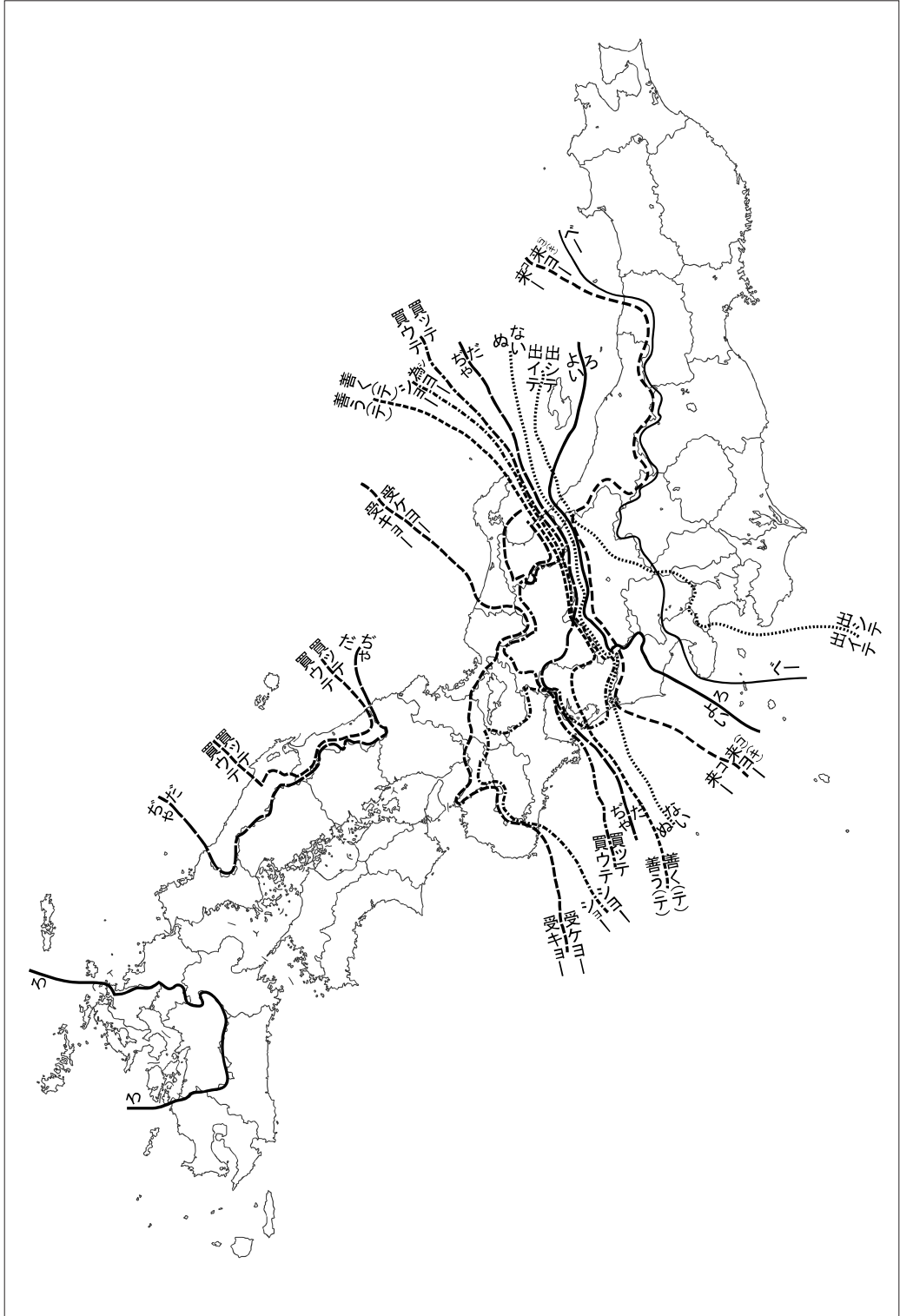


図10 新村出「東西語法境界線概略」の境界線（北海道・琉球を除く）



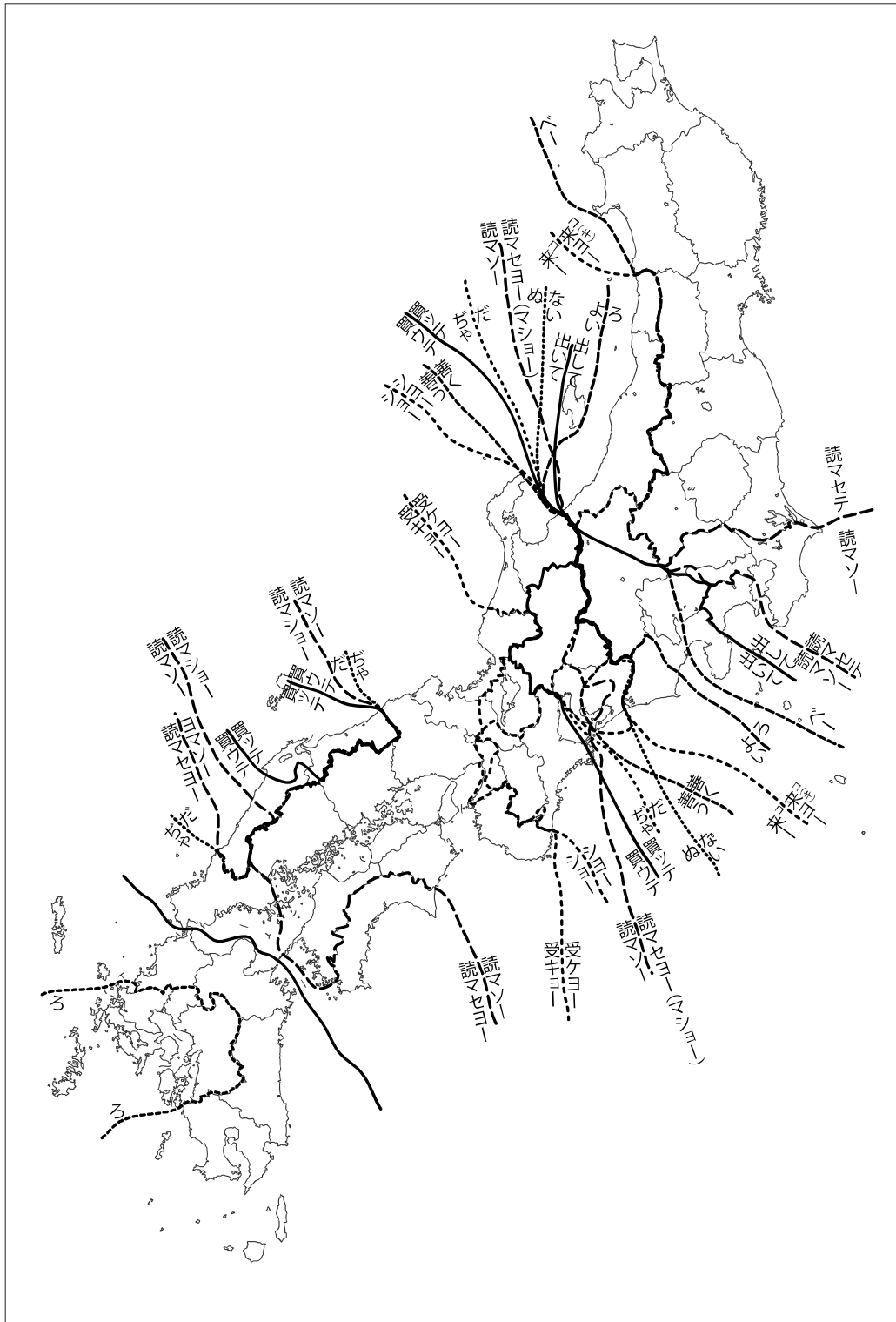


図11 新村出「東西語法境界線概要図」の境界線（北海道・琉球を除く）

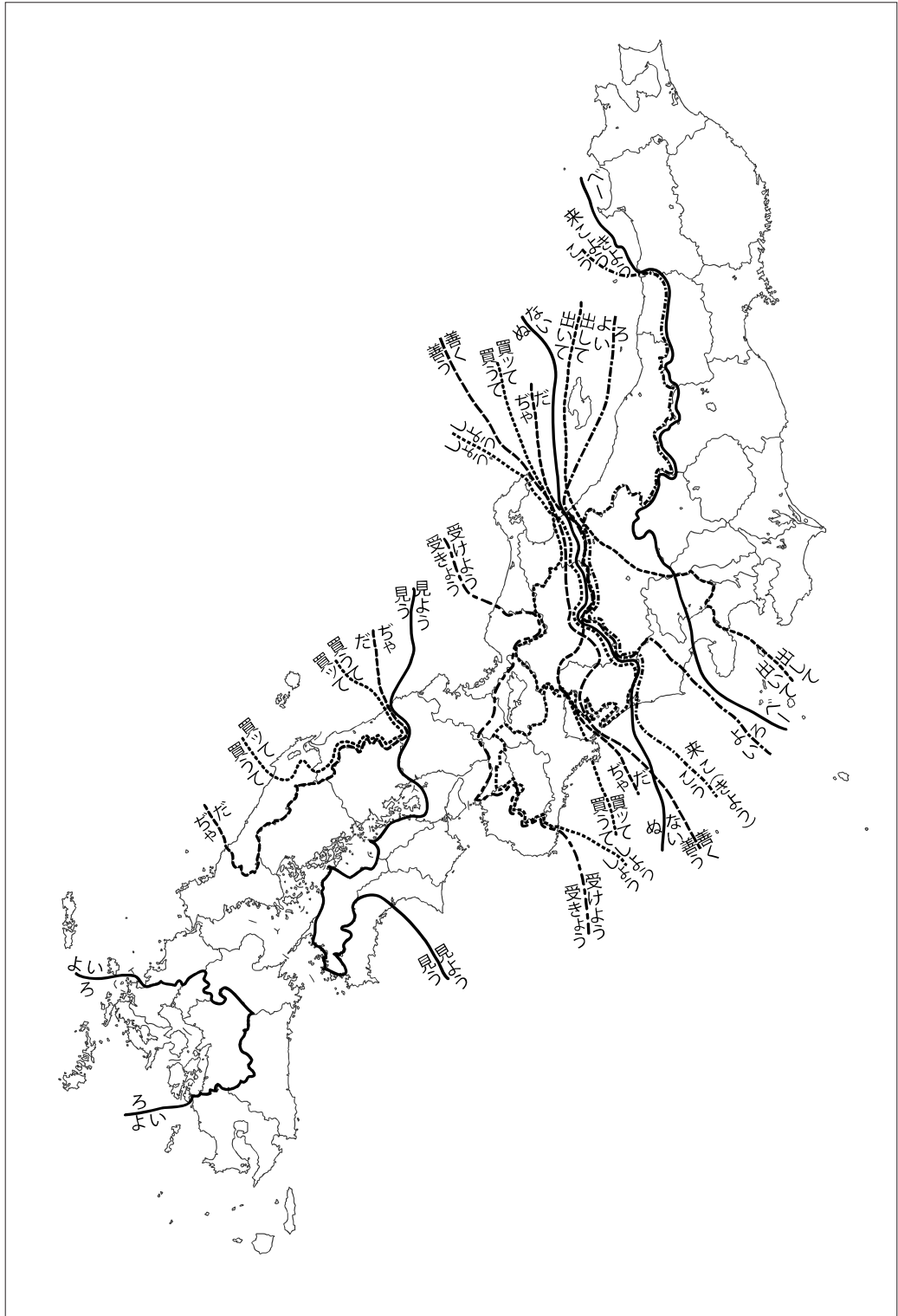


図12 大槻文彦「東西語法境界線概要図」の境界線（北海道・琉球を除く）

東語區域対照」とあることから裏付けられると考えられる。

凡例の文字部分について、確認しやすいように取り出し、図13に「新村概要」、図14に「大槻概要」を示した。これらの図では省略したが、「新村概要」「大槻概要」の凡例の線は、実線・点線等の種類が同じである。「新村概要」「大槻概要」には、附言の前までに、順番・表記は異なるが同じ11種類がある。「新村概要」凡例には右から一、二、四、五、十、(中略)十二、十三という順不同の番号が付されており、「大槻概要」凡例の順番と完全に一致する。なお、「大槻概要」凡例には番号が付されていない。「概略」では境界線の東西に命令表現の「ろ/よ・い」の文字が書き込まれておらず、書き漏らしたと考えられる。

また、「新村概要」の十二と十三は「附言」の後にあり、「大槻概要」にはないため、後で加筆されたと考えられる。さらに、十二は本州・四国と九州の間に引かれるため西にすぎ、十三の境界線は4本もあって煩雑であるため、「概略」には残らなかったと考えられる。

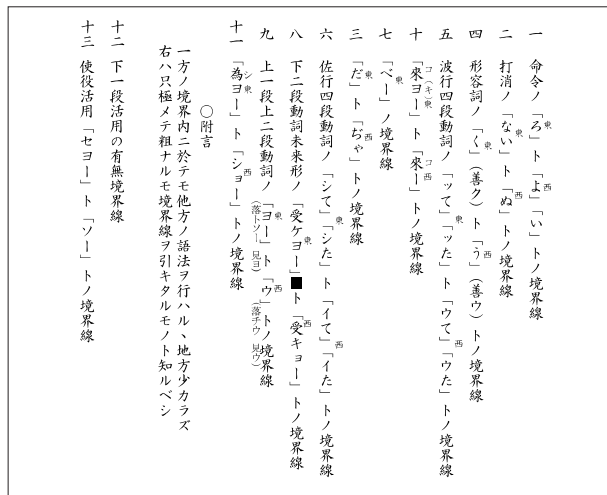


図13 凡例：新村概要（音韻を除く）

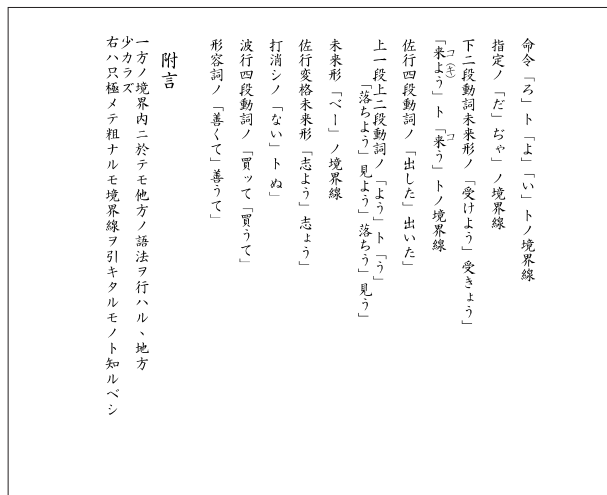


図14 凡例：大槻概要

表5 凡例（口語法のみ抜粋）

|    | 文言（「概略」のみ、図から推定）                         | 番号 | 並び |
|----|--|----|----|
| 概略 | （ろ／よい）                                   | 欠  | 欠  |
| 新村 | 命令ノ「と」ト「よ」「い」トノ境界線                       | 1  | 1  |
| 大槻 | 命令「ろ」ト「よ」「い」トノ境界線                        | 欠  | 1  |
| 概略 | （ない／ぬ）                                   | 欠  | 欠  |
| 新村 | 打消シノ「ない」ト「ぬ」トノ境界線                        | 2  | 2  |
| 大槻 | 打消シノ「ない」トぬ                               | 欠  | 9  |
| 概略 | （だ／ぢゃ）                                   | 欠  | 欠  |
| 新村 | 「だ」ト「ぢゃ」トノ境界線                            | 3  | 7  |
| 大槻 | 指定ノ「だ」ぢゃ」ノ境界線                            | 欠  | 2  |
| 概略 | （善く（テ）／善う（テ））                            | 欠  | 欠  |
| 新村 | 形容詞ノ「く」（善ク）ト「う」（善う）トノ境界線                 | 4  | 3  |
| 大槻 | 形容詞ノ「善くて」善うて                             | 欠  | 11 |
| 概略 | （買ッテ／買ウテ）                                | 欠  | 欠  |
| 新村 | 波行四段動詞ノ「ッテ」「ッた」ト「ウテ」「ウた」トノ境界線            | 5  | 4  |
| 大槻 | 波行四段動詞ノ「買って」「買うて」                        | 欠  | 10 |
| 概略 | （出シテ／出イテ）                                | 欠  | 欠  |
| 新村 | 佐行四段動詞ノ「シテ」「シた」ト「イテ」「イた」トノ境界線            | 6  | 8  |
| 大槻 | 佐行四段動詞ノ「出した」出いた                          | 欠  | 5  |
| 概略 | （べー／その他）                                 | 欠  | 欠  |
| 新村 | 「べー」ノ境界線                                 | 7  | 6  |
| 大槻 | 未来形「べー」ノ境界線                              | 欠  | 7  |
| 概略 | （受ケヨー／受キョー）                              | 欠  | 欠  |
| 新村 | 下二段動詞未来形ノ「受ケヨー」ト「受キョー」トノ境界線              | 8  | 9  |
| 大槻 | 下二段動詞未来形ノ「受けよう」受きょう                      | 欠  | 3  |
| 概略 | 欠  | 欠  | 欠  |
| 新村 | 上一段上二段動詞ノ「ヨー」ト「ウ」トノ境界線（落ちヨー、見ヨー）（落ちウ、見ウ） | 9  | 10 |
| 大槻 | 上一段上二段動詞ノ「よう」ト「う」「落ちよう」見よう「落ちう」見う        | 欠  | 6  |
| 概略 | （來（コ）（キ）ヨー／來（コ）ー）                        | 欠  | 欠  |
| 新村 | 「來ヨー」ト「來ー」トノ境界線                          | 10 | 5  |
| 大槻 | 「來よう」ト「來う」トノ境界線                          | 欠  | 4  |
| 概略 | （為（シ）ヨー／ショー）                             | 欠  | 欠  |
| 新村 | 「為ヨー」ト「ショー」トノ境界線                         | 11 | 11 |
| 大槻 | 佐行変格未来形「志よう」志ょう                          | 欠  | 8  |
| 概略 | 欠  | 欠  | 欠  |
| 新村 | 下一段活用の有無境界線                              | 12 | 12 |
| 大槻 | 欠  | 欠  | 欠  |
| 概略 | 欠  | 欠  | 欠  |
| 新村 | 使役活用「セヨー」ト「ソー」トノ境界線                      | 13 | 13 |
| 大槻 | 欠  | 欠  | 欠  |

表6 東西の境界線の種類と数

|      | 種類, 本数    | 凡例   |
|------|-----------|------|
| 概略   | 10種類, 14本 | (なし) |
| 新村概要 | 12種類, 17本 | 13種類 |
| 大槻概要 | 11種類, 14本 | 11種類 |

境界線の種類と比べると、「見よう／見う」に対応する凡例が「新村概要」「大槻概要」にあるが、境界線は「大槻概要」にはあって、「新村概要」「概略」にはない。この違いから、内容から考えると、「大槻概要」が書写される段階に存在した凡例・境界線が、「新村概要」では境界線が落ちて凡例のみになり、「概略」では凡例・境界線ともなくなったと考えられる。

表7 音韻に関する内容

|      |  |
|------|--|
| 概略   | (なし)   |
| 新村概要 | 塗りつぶしによって次の3種類がある。<br>・ガ行鼻音<br>・「クウ」「カ」ノ別<br>・「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」ノ別 |
| 大槻概要 | (なし)   |

表7の音韻についての内容は「新村概要」にのみあり、新村(1905)、新村(1906)に特に対応する内容があるため、新村独自のものと考えられる。音韻については、凡例とみられるものが凡例欄の下に配置された北海道の地図上に3種類があり、これらの組み合わせでさらに6種類の塗り(または着色)による凡例がある。白黒の口絵写真で判別しがたいため現時点ではこれ以上の分析は断念するが、東北・関東・中部・近畿地方と徳島県に音韻の区別による塗りがあるように見える。このような塗りは「大槻概要」にはない。

表8 その他(附言・追記・識語など)

(／は改行)

|      |  |
|------|--|
| 概略   | 地図左上に次の「識語」がある。<br>「この方言分布境界図は予が文部省／内なる国語調査委員会の補助委員として／方言分布を調査せしときに私に総合概括を／試みて作りて参考の資に供せしものにて、主査／委員たりし上田万年博士にも示し、稿本の一／なり、明治三十七年の十二月のころの撰にて、其の／素材ハ同会の調査書(音韻口語法共合参冊)に拠り傍ら／自分らの踏査の成果をも採りしに過ぎず、語／彙は全く之を除きたれば、本図の価値に至／りては、殊に現今のごとき(方言研究の)進歩せる時代に方りては、／いとおぼつかなきやうにおぼゆれとも、自分にとりては殆ど／四十年前(三十歳)の編輯にかかるものにて、なつかしき／に堪へざるものなり、昭和十八年(1943)年十一月一日 六十八翁／新村出識」 |
| 新村概要 | 枠外右上に「第三稿」とある。<br>凡例の左に附言2文・2行があり、<br>「一方ノ境界内ニ於テモ他方ノ語法ヲ行ハル、地方少カラズ／右ハ只極メテ粗ナルモ境界線ヲ引キタルモノト知ルベシ」とある。   |
| 大槻概要 | 凡例の後に附言2文・3行があり、文言は同上だが改行位置は異なる。<br>「一方ノ境界内ニ於テモ他方ノ語法ヲ行ハル、地方／少カラズ／右ハ只極メテ粗ナルモ境界線ヲ引キタルモノト知ルベシ」とある。  |

表8の「概略」の識語は、図の成立から約40年後に記されたもので、「稿本の一」とあることから、「概略」の他にもこのような図があること、つまり「新村概要」の類の存在を示したものと考えられる。

附言については、「新村概要」「大槻概要」の文言は同一であり、明らかにどちらかが書写である。

### 3. 2 成立とその背景

以上、図の形状や記載内容の異同を見てきたが、これによって、「東西方言境界線図」類の成立については次のように考えられる。最初に、口語法と音韻の両方が描かれた新村による祖図のようなものがあり、改訂が行われていたが、「新村概要」は少なくともその第三稿にあたる。祖図または第二稿から口語法境界線のみを抜粋した「大槻概要」が書写された後、新村はさらに加筆を行い、「概略」で方言と東国語との対照を行ったと考えられる。

このことは、次のような背景事情からも裏付けられる。

「東西方言境界線図」類の成立には、国語調査委員会による内容だけでなく、大槻文彦と新村出の研究内容が深く関わると考えられる。表9に、国語調査委員会のうち第一次音韻口語法取調または口語文法制定案に関わる議事内容と、大槻文彦と新村出の動向を大まかにまとめた。委員会の議題内容等は小岩弘明(2010)による大槻文彦「国語調査委員日記」を引用し、新村については「年譜」「稿本目録」「書誌」(『新村出全集索引』)、その他は『日本帝国文部省年報』『官報』、各教育雑誌の記事を参考に作成した。

「東西語法境界線図」類成立時の前後は、口語法調査報告の整理作業の最中でもあったが、小岩(2010)も指摘するように1904(明治37)年度の議題には口語文法制定案が目立って多く、大槻による口語文法制定案が最初の山場を迎えた時期でもあった。

表9 国語調査委員会・大槻文彦・新村出に関わる出来事

| 年月日              | 出来事  |
|------------------|--|
| 1899(明治32)年1月9日  | 新村, 東京帝国大学大学院に入学(上田万年教授指導)   |
| 1900(明治33)年4月16日 | 委員会: 第一回 国語調査委員会(大槻出席)   |
| 5月25日            | 委員会: 如何ナル地ノ言語ヲ標準トスベキカ○其言語ヲ改良スベキカ(以下略)                                      |
| 7月23日            | 新村, 大学の命により, 飛騨白川村方言採集調査のため八杉と共に出張   |
| 1901(明治34)年3月20日 | 新村, 附出張辞令, 静岡県伊豆西海岸北部及び天城山中一部の方言採集調査。音韻の分布状態, 語形(例「ペー」)の分布状況, 語彙(風位ほか)の採集等 |
| 7月15日            | 新村, 附出張辞令, 静岡・愛知両県下の中西駿遠参尾両地方の方言採集調査                                       |
| 1902(明治35)年4月15日 | 委員会: 全国ノ方言並ニ発音ノ取調 上田氏  |
| 4月16日            | 新村, 国語調査委員会補助委員 囑託   |
| 4月22日            | 委員会: 保科孝一 方言蒐集辞書   |
| 1903(明治36)年1月9日  | 委員会: 発音調査ニ関スル事項  |
| 4月9日             | 委員会: 音韻調査ニ主トシテ「ローマ」字ヲ使用スベキ議○方言蒐集方案   |
| 6月18日            | 委員会: 方言蒐集案   |
| 6月30日            | 委員会: 土音方言取調ニ関スル事項 己ガ案  |
| 7月9日             | 委員会: 口語法取調ニ関スル事項ヲ出ス  |
| 7月13日            | 委員会: 口語法取調ニ関スル事、音韻取調ニ関スル事項   |

| 年月日              | 出来事  |
|------------------|--|
| 8月25日            | 『音韻口語法取調』調査票，発行（第一次取調）   |
| 9月9日             | 『音韻口語法取調』調査票，発送（第一次取調）   |
| 9月29日            | 委員会：愛媛県へ音韻口語法取調ニ付問案ノ答ノ答  |
| 12月30日           | 『音韻口語法取調』調査報告の提出締め切り   |
| 1904（明治37）年2月5日  | 委員会：方言蒐集方案 補助委員ニ任ス（林泰輔・保科孝一・岡田正美・新村出・大矢透）                          |
| 2月・3月            | 2月『音韻口語法取調』大半が到着。3月『音韻口語法取調』未回答11県。                                |
| 4月初旬             | 『音韻口語法取調』回収終了，内容不明の区域に照会。  |
| 4月15日            | 委員会：四月初旬音韻口語法諮問返答皆納トナル   |
| 6月3日             | 委員会：音韻調査ノ報告  |
| 7月7日             | 委員会：打消文法案  |
| 9月30日～11月25日     | 委員会：この間，断定ノモノ了／打消ノ助動詞，ヂツ連濁ノ調／敬語，たいらしい，過去ノた だ，指定ノモノ だ ちゃ，ヂジズツノ連濁 議了 |
| 12月12日           | 新村「東西語法境界線概要図」（第三校）（図の欄外に日付）                                       |
| 12月13日           | 大槻「東西語法境界線概要図」（図の欄外に日付）  |
| 12月13日           | 新村，「東西語法境界線概要図」編了（年譜p.500）   |
| 12月              | 新村，「東西語法境界線概略（古代東語区域対照）」（稿本目録p.467）                                |
| 12月17日           | 新村，東大言語学談話会にて「東国方言の古今」と題し講演（年譜p.500）                               |
| 12月23日           | 委員会：口語文法制定案八、九説明ノミ／新村氏徴兵ニ付昨日解囑                                     |
| 12月25日           | 新村，「近衛歩兵第二聯隊補充大隊に召集、即日召集解除」（年譜p.500）                               |
| 1905（明治38）年1月8日  | 新村，国語調査委員会補助委員を再囑託   |
| 3月17日            | 『音韻調査報告書』『音韻分布図』刊行   |
| 3月・4月            | 新村，「国語に於ける東国方言の位置」（上・下）『教育学术界』10・6・11・1                            |
| 4月22日            | 大槻，上野女学校 課外講話にて「日本方言の分布区域」と題し講演                                    |
| 6月10日            | 大槻，「日本方言の分布区域」『風俗画報』318  |
| 1906（明治39）年12月7日 | 『口語法調査報告書』（上・下）刊行  |
| 1906（明治40）年1月25日 | 新村，京都帝国大学文科大学助教授に転任  |
| 2月28日            | 『口語法分布図』刊行   |
| 1913（大正2）年6月13日  | 行政整理のため，国語調査委員会廃止  |
| 1916（大正5）年12月10日 | 『口語法』刊行  |
| 1917（大正6）年4月28日  | 『口語法別記』刊行  |

大槻文彦は、小岩弘明（2010）によると、国語調査委員会の発足から廃止までの約11年間（休日・休暇等を除く）を、委員としての調査研究と口語文法制定案の作成に費やした。一方、新村（1938）には、着任前から東西方言境界というテーマを持っており、岐阜・愛知・静岡の方言調査に赴き、特に3回目の調査（1901（明治34）年）7-8月）には「郷里の静岡以西、名古屋以東にわたる東海道及びその近接地方の言語、すなはち東西両系統の言語の境界を推定する試案を以て出かけていつた（p.282）」とある。委員会着任後は、保科孝一と共に音韻・口語法の調査票の立案・作成整備・結果整理に従事したとあり（p.283）、東西方言境界線の確定というテーマが、音韻口語法取調の調査票に反映されたとみられる。

「東西語法境界線図」類を用いたと思われる内容に、図の成立日（1904（明治37）年12月13

日) からみて新村には4日後、大槻には約4ヶ月後の口頭発表があるが、双方の立場は異なる。新村が古代日本語との対照に重点をおき、古代日本語と現代の方言分布が一致することから方言調査の必要を主張するのに対し、大槻が言語の東西差に種類があることを認めつつ「東京言葉」を標準口語法の基盤として位置づけることを主張する。具体的には次のようである。

新村は、1904(明治37)年12月17日(土)の東京大学言語学談話会にて「東国方言の古今」(新村(1905)に収載)の題目で発表し、音韻を含む古代日本語の東西差を史的に分析した上で、「東西語法境界線図」類にも示された命令・打消・指定・音便・未来の語形を例に挙げ、「東西語法の境界線は、概して古代東語の境界線に添うて多く引ける」こと、「標準語問題の解決は東西両方の言葉争ひの解決」であること、標準語法制定のためには国語学上から東国語の沿革と現在の分布を調査する必要があることなどを述べた。

大槻は、1905(明治38)年4月22日(土)の上野女学校の講演会「日本方言の分布区域」において、全国の話しことばの統一について述べた。最初に、方言区域の「違ひ目」を話そうにも調べがつかず困難であると前置きし、打消・命令・音便・下二段活用・未来・指定・丁寧には語形に東西差があることを挙げたのち、「此の東西の大凡の境目は遠州信州越後となる此處には大きな山脈があるから自然と遮られて此の境目を成すのであらう話言葉の古今の遷り變はりとは方言の分れ目とは大抵右の通りの姿である」と述べた。さらに、「都といへば東京か西京かである」が、「東京言葉には勢があり地方の人も東京言葉を真似る傾きがあるから東京言葉を基として訛りを直して各地方の多くの人が遣って居るものを斟酌して定めたならば目安言葉が出来てあらう」と結論づけた。

これらの内容は、双方の研究の流れに添うものと考えられる。当時、新村は音韻と口語法の両分布図を担当し、他にも悉曇書や抄物の調査を行いつつ音韻変化を論じており、次第に日本語の祖語を求める研究に取り組むようになる。一方、大槻は、標準口語法の制定を目指した『口語法』『口語法別記』を成し、『言海』の改訂に取りかかろうとしていた。このような双方の研究が、新村の図には口語法境界線に加えて音韻・東国語が示され、大槻の図には口語法境界線のみという形で、それぞれの「東西語法境界線図」類にあらわれたと考えられる。

#### 4. まとめと今後の課題

以上で述べたことをまとめると、「新村概要」「概略」には口語法だけでなく音韻や東国語があり、「大槻概要」は口語法のみで、各人の研究内容に即した違いがみられる。また、最初に新村による祖図のようなものがあり、少なくとも第三稿まで改訂されていたとみられる。それを書写した「大槻概要」ができた後、新村はさらに改訂を重ねた「概略」で方言と東国語との対照を行い、日本語の歴史と方言の成立を論じたと考えられる。

これらの図で描きだされた東西方言の境界線は、その後、『音韻調査報告書』『口語法調査報告書』における方言の東西対立の指摘となったと考えられる。この指摘は国語調査委員会の最も有名な成果とされ、その後の方言区画論の契機ともなったが、三枚の図の境界線との関係は、いまだ解明されていない。今後は、どのようにして東西対立が導き出され、どのように利用されたのか、特に『口語法調査報告書』の具体的な記載内容とこれらの境界線との比較から、解明する必要がある。

謝辞 原図の閲覧・利用にあたって小岩弘明氏(一関市博物館)からご協力を得た。記して感



謝申し上げる。本研究は、社会言語学会第28回研究発表大会（2011（平成23）年9月18日）における口頭発表をもとに加筆・修正したものである。また、2008-2011年度科学研究費・基盤研究（C）課題番号20520430「明治期国語調査委員会資料と『日本言語地図』『方言文法全国地図』による分布解釈研究」（研究代表者：吉田雅子）の成果による。

## 参考文献

- 大槻文彦（1904）「東西語法境界線概要図」『一関市博物館常設展示図録』一関市博物館，p.76
- 大槻文彦（1905）「日本方言の分布区域」『風俗画報』318，pp.12-17（「東京日々新聞」から転載）（国書刊行会より復刻版，1977年）
- 小岩弘明（2010）「国語調査委員会の活動を探る—大槻文彦『国語調査委員日記』から—」『一関市博物館研究報告』13，pp.47-62
- 国語調査委員会（文部省）編（1905）『音韻調査報告書』日本書籍（国書刊行会より1986年復刻版）
- 国語調査委員会（文部省）編（1905）『音韻分布図（音韻調査報告書別冊付録）』日本書籍（国書刊行会より1986年復刻版）
- 国語調査委員会（文部省）編（1906）『口語法調査報告書』国定教科書共同販売（国書刊行会より1986年復刻版）
- 国語調査委員会（文部省）編（1907）『口語法分布図（口語法調査報告書別冊附録）』（計2冊）国定教科書共同販売（国書刊行会より1986年復刻版）
- 財団法人新村出記念財団 編（1983）『新村出全集—索引—』筑摩書房
- 新村 出（1905）「国語における東国方言の位置（上下）」大日本学術協会（編）『教育学术界』10（6）pp.12-20，同11（1）pp.14-24（『新村出全集』1に再録）
- 新村 出（1906）「音韻史上より見たる「カ」「ク」の混同」『國學院雑誌』1（『新村出全集』1に再録）
- 新村 出（作図）・江 實（撮影）（1933）『方言』3（6），（口絵写真）
- 新村 出（1938）「上田先生を偲ぶ」『方言』8（2）（上田万年博士追悼記念文集）（『新村出全集』3に再録，「上田先生と方言調査」に改題）
- 新村出（1971-1973）『新村出全集』全15巻，筑摩書房
- 新村 出（作図）（1993）『新村出自筆「東西語法境界線概略—古代東語區域對照』』財団法人新村出記念財団・岩波書店（明治37年製自筆の複製）
- 徳川宗賢（1993）「新村出自筆「東西語法境界線概略」解説」『新村出自筆「東西語法境界線概略—古代東語區域對照』』別冊，財団法人新村出記念財団・岩波書店
- 平山輝男（1986）「『口語法調査報告書』及び『口語法分布図』について」国語調査委員会編『口語法調査報告書』国書刊行会（復刻版）